

ダルマキールティ年代論の追加資料

木村俊彦

はじめに

シュタインケルナー (Ernst STEINKELLNER) 博士は近著の *Dharmakīrtis frühe Logik, Annotierte Übersetzung der logischen Teile von Pramāṇavārttika 1 mit der Vṛtti* (Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies, 2013) の introduction における “Dating Dharmakīrti” の初めに, 「長らくフラウワルナー博士のダルマキールティ年代論 c. 600–660 年説が受け容れられていたが, Toshihiko KIMURA や Christian LINDTNER の新提案を機会に, T. J. F. TILLEMANS らが加わって賑やかになった」とされる. リントナー氏は七世紀末 (山口益氏) のバヴヤを六世紀のバーヴィヴェーカと混同したもので, “Apropos Dharmakīrti: Two New Works and a New Date” (*Acta Orientalia* 41, 1980) を指している. 重要なので後述する. 木村は日本版では『ダルマキールティにおける哲学と宗教』(大東出版社, 1998) の序論第 2 章「ダルマキールティの年代論」で提唱し, ヨーロッパ版の T. KIMURA, “A New Chronology of Dharmakīrti” が続く¹⁾.

所で, ‘früh’ というのはダルマキールティの初期の論理学という意味の様だが, 彼は『プラマーナヴァールツティカ』で, 「ヨーガ者の智については前に述べた」と言っており, それは『ニヤーヤビンドゥ』現量章を指すことを, 私は「ダルマキールティにおける現観ヨーガ論」(『印度學佛教學研究』第 60 卷第 2 号, 2012) で指摘した. また不知覚因の用法でも 11 種を挙げて最初期を示していると共に, 帰謬の用法は『ヴァーダニヤーヤ』等のように定式化していない. 逆に唯識派のヴィニターデーヴァは最初期の『ニヤーヤビンドゥ』のみに註記している.

マンダナミシュラのダルマキールティ引用

シャーストリー (Kuppuswami SASTRI) は, 編集した *Brahmasiddhi by Maṇḍanamiśra* (Madras: Journal of Oriental Research, 1937), introduction, p. 58 で, マンダナミシュラの

年代を 615-695 年としている。この年代論は斯学では有名であるが、我々のダルマキールティ年代論でも生きてくる。マンダナミシュラは *Sphoṭasiddhi* で、ダルマキールティのスポータ批判である、“vākyaṃ na bhinnam varṇebhyo vidyate ’nupalambhanāt” (Pv. I, k. 251) を引用する。「文章は音声と別個に在るのではない、そのようには知覚されないから」というスポータ説批判である。かくマンダナミシュラは、ダルマキールティに対応する十分な時間差があつて反論できた。後者は、評価されないことを嘆いているからである(既説)。複註者のカルナカゴーミンは、マンダナミシュラの次偈を引用して、「単一の文章や語句でも次第に開示する」という彼の回答を引用している²⁾。

日本では金倉圓照博士が、スレーシュヴァラが *Bṛhadāraṇyakopaniṣadbhāṣya-Vārttika* で引用している事を、既に昭和 7 年の「法稱 (Dharmakīrti) の断片」(『哲學雑誌』第 547 号, 1932) の p. 65 で指摘している。この論文は我が邦ダルマキールティ研究の嚆矢である。A. W. THRASHER は、伝承 (*Śaṅkaradigvijaya*) と違ってマンダナミシュラがシャンカラの弟子スレーシュヴァラとは別人で、700 年頃と措定した。結果的にはこれもクップスワーミの年代論と同じ結果になる³⁾。

義浄の記述が有名だからこれらの外道哲学者のダルマキールティ引用も矛盾ないように見える。不人気を嘆いた詩(小著の序参照)から見て、著名になった死後 70 年頃に該当する。マンダナミシュラや金剛智もシャンカラの弟子スレーシュヴァラと共にこの枠に入る。フラウワルナー博士は義浄の『南海歸寄内法傳』(大正蔵 no. 2125) に直接依っている⁴⁾。因みに H. NAKAMURA, *Indian Buddhism: A Survey with Bibliographical Notes* (Delhi: Motilal Banarsidass, 1989), pp. 303-304 で言われる、私が中村博士にお渡しした年代メモは勿論フラウワルナー説に基づいていた。またプラジュニャーカラグプタの年代も小野基氏の研究によって「c. 800」と改めなければならない⁵⁾。

次にダルマキールティ年代の上限が問題になってくるが、護法の正しい年代と玄奘の示唆(後述)、そしてディグナーガの年代論と関連してくる。服部正明氏は「ディグナーガ及びその周邊の年代」(『塚本博士頌壽記念 佛教史學論集』塚本博士頌壽記念會, 1961) で、ディグナーガが『三時の考察』でコピーアンドペーストしたバルトリハリ (c. 450-510) との関係から c. 470-530 年とし、同年にフラウワルナー博士も前掲論文で c. 480-540 年と見ている。尚、ここでは詳論しないが、お二人の無着・護法の年代論は受け容れられない。特に二人が是認する宇井伯壽博士の護法: 530-561 年説は、中国伝承に依った訛形であり、彼は我々が既に論じたよ

(84) ダルマキールティ年代論の追加資料 (木 村)

うにダルマキールティと同世代の後輩である。630年代に玄奘は、まだ護法の示寂の余韻が去らない時に護法の住房を伝えられていたのであるから⁶⁾、後者は630年頃の逝去であろう。戒賢が護法の直弟子なら尚更である。そしてディグナーガの後にウッディヨータカラなど数人のニヤーヤ学派が来なければならないから、ディグナーガ没後、やや間隔を置いてダルマキールティが誕生したと見ると、ウッディヨータカラなどへのダルマキールティの批判が理解できる。これでダルマキールティの絶対年代がはっきりした。

ダルマキールティの『プラマーナヴァールuttiカ』自比量章自註に注解したカルナカゴーミンは、ディグナーガ以後の論師を引用するが、それはイーシュヴァラセーナ、ウッディヨータカラ、クマーリラ、アディヤヤナ、アヴィツダカルナというダルマキールティ以前の論師から、ダルマキールティを引用・批判したマングダナ、ウンヴェーカまで引用している。中村元博士はマングダナミシュラを約670-720年とされ、伊原照蓮博士は七世紀後半と結論されたが、おおよそ学者の推定は同じで、ダルマキールティとの間隔も合理的である⁷⁾。

サーンクリトヤーヤナのダルマキールティ年代論

一体、これまでの年代論で、彼の述懐にダルマキールティが自身を世に知られないことを嘆いていることが全く考慮されていない。詩偈に注意したのは、我々が初めてだから(小著の序論第3章)無理もないが、ダルマキールティが慨嘆することから、学ばれるようになったのには或る程度の間隔を考慮しなければならない。若き金剛智が西インドで「法称論」を学んだのは七世紀後半から終り頃に向ってであったが、後述するスバンドウの延引は、はるかにダルマキールティに近接する。

そこで次に玄奘が伝えていないことをどう理解するかもダルマキールティ年代と関係するが、それにはかのラーフラ・サーンクリトヤーヤナに語らせる方が良いかも知れない。『ヴァーダニヤーヤ』の編集序(*Vādanyāya*, edited by R. Sāṅkrtyāyana, *Journal of the Bihar and Orissa Research Society*, 1936)である。

ここではこの事、つまり玄奘がなぜ彼について沈黙しているかの推論がある。1. まずはダルマキールティの論理学を玄奘が理解できなかったほかに、2. 玄奘がナーランダールに着いた635年にはダルマキールティは既に亡くなっていた(これは重要)。3. 玄奘学派に論理学を理解する学者がいなかった。彼の編集者達(compilers)にとっては、サンスクリットはあまりに簡潔で難しいということもあ

る。4. 結局玄奘がナーランダールに到着した 635 年より早い 625 年がダルマキールティの最下限になるとする。カルナカゴーミン複註の編集における「(600)」という位置付けが、かくて説明されたし、小論と同様なのは心強い⁸⁾。

金倉博士は昭和 10 年の『佛教學の諸問題』(岩波書店, 1935) にダルマキールティ問題を取り上げ、『印度精神文化の研究』(岩波書店, 1944) の第八「法稱の量釋頌とチャイナ教義」に再録した。その p. 357 に義浄の「法稱重ねて因明を明らかにす」という紹介と、博士の釈した護法の『観所縁論釈』の文を引用された。

又若自許不於識外緣其實事, 應有有法自相違過。然法稱不許。(大正藏第 31 卷, p. 889 下段)

つまり「又若し自から識の外に於てその実事を縁せず(認識せず)と許せば(認めれば), 応に有法(主語)の自相違過有り, かく法稱は許さず」とある。但し金倉博士は「不許法稱」と誤引されている。

原子 (paramāṇavaḥ) 論者が、感覚の通りには実在は無いと言うなら、自らの主張と矛盾するではないかというもので、自語撞着の過失を言う。『ニヤーヤビンドウ』III, 48, “anirākṛta iti yaḥ sādhyaitum iṣṭo ’pyarthaḥ svavacanair nirākriyate” の注意にあたる⁹⁾。護法はこの本を持っていた可能性がある。宇井伯壽『陳那著作の研究』(岩波書店, 1958) p. 29 もここが読めていない。このあたりは小著の序論第 2 章で詳論したので、参照されたい。慈恩学派に伝えられたダルマキールティ存在論については、「渡邊論文の三類境説」で後述する。

ヨーロッパの学者のダルマキールティ年代論

コペンハーゲンのリントナー (Christian LINDTNER) 氏は “Apropos Dharmakīrti: Two New Works and a New Date” (*Acta Orientalia* 41, 1980) において, Bhavya (Legs ḥden の目録還梵) が *Madhyamakaratnapradīpa* において, ダルマキールティに *Laukikapramāṇaparīkṣā* など二著の延引があるとするが (pp. 27-37), バーヴィヴェーカのものとは誤認した決定的な誤りがあり, 山口益氏のほか古く, ワルシャワのシャイエール氏の指摘がある。この書物が前者のものではないことは、『梵語仏典の研究』III・論書篇 (平楽寺書店, 1990) の pp. 229-230 で高野克宏氏が紹介する。それは S. SCHAYER 氏と山口益氏が, それを 700 年頃の著作と位置付けているという。シュタインケルナー博士が前掲書の序論 p. 29 で触れられた「偽バーヴィヴェーカ」に依る論旨は, リントナー氏の場合と同様と思われる (前述)。

そこでシャイエール氏を延引した高野克宏氏の記述を引用する。

(86) ダルマキールティ年代論の追加資料 (木 村)

『中観宝灯論』(Madhyamaka-ratna-pradīpa)のサンスクリット本は、現在では失われ、チベット訳が伝わるだけである(デルゲ版東北目録No. 3854)。全体が9章よりなり、その中では二諦説を中心とした中観派の学説が要領よくまとめられている。(中略)

チベットにおいては、伝統的にBhāvaviveka(或いは、Bhavya)に帰せられてきたが、このことは古くから疑問視されてきた。(*)

(*) S. Schayerは、『中観宝灯論』の英訳に先立ち、“The obviously erroneous attribution to Bhavya”と述べて、著者をBhavyaと見做すことを否定し、この書がBhavyaに帰せられたのは題名が『般若灯論』に類似していたためではないかと言う。Cf. Stanislaw Schayer, *Notes and Queries on Buddhism*, Rocznik Orientalistyczny, Tom 11, Warszawa 1935, Reprint 1988, p. 206 (以上は原註)¹⁰⁾。

この著者に関して山口益氏は本書の内容を詳細に検討し、「これは『中観心論』等の著者とは別人の手に成り、大体700年頃、即ち中観説が密教的変遷のあった雰囲気の時代の産であろう」と推理する¹¹⁾。清弁の自立論証派とは対立関係にあったチャンドラキールティを称える記述や、ダルマキールティの著書の引用があることを根拠にする。氏はバーヴィヴェーカを490-570年頃と措定している。

渡邊論文の三類境説

既に論じたが、もう一度渡邊照宏「佛教論理學派と刹那滅説の論證」(『哲學年報』第14輯, 1953, pp. 87-100)の所説を見る。いわゆる護法唯識説と異なる対象論が、慈恩宗によって三類境説として伝えられた。『成唯識論掌中樞要』や『唯識了義燈一末』などに三類境の説があり、実の性境より体・用が生じ、性境は自相を持つというのである。但し刹那滅説の論證は出てこない。これは『ヴァーダニヤーヤ』において帰謬論法で証明される(木村俊彦「Sādhyaviparyayabādhakapramāṇam」『印度學佛教學研究』第50巻第1号, 2001)が、当該論文のタイトルに反して論じられていない。

これに関して「作用」(arthakriyā)の語源はヴァーツスヤーヤナのNyāyabhāṣyaに求められるが、発想は説一切有部の時間論(三世実有論)を改変した経量部に由来する。即ち有部は有為的存在(saṃskṛtadharmah)の過去・現在・未来の三世に実有なること(無為法は三世という区別なく恒に有)を言い、その相は作用性(kāritram)であるとする。それが三世に作用性として在るというのである¹²⁾。

法の体を「自相」(svalakṣaṇah)と呼ぶ。経量部としてはヴァスバンドウが『アビダルマコーシャ』第5章睡眠品で時間論を論じている。有部の論師は三世に有りと説いても「滅相」を立てて永遠とは言わないと、矛盾を初めに指摘する。作

用 (kāritram) なき時は未来 (anāgataḥ), 為しつつある (karoti) 時は現在 (pravartamānaḥ), 為し了って滅した時は過去 (atītaḥ) だと彼らは言う。次に有部の四師の論を引用する。そして「第三の (ヴァスミトラの) 説が (その中では) 最善」と言う。「現在は作用によって存在する」(adhvānaḥ kāritreṇa vyavsthitāḥ / Ak. 5, 26b) からだとする。これが経量部説であり, ダルマキールティはこれを承けている。ヴァーツスヤヤーナの “arthakriyā” の用法はこの思想と関係なく, ダルマキールティは有部臭を除く為にこちらを採ったのであろう。ヴァスバンドウの所説であれば, 慈恩宗は『俱舎論』や「世親」の名を出すであろう。名を伝えていないのは当時の状況, ダルマキールティがまだ著名でなかった当時の反映ではないか。そしてこのことが, よく史料に使われてきた玄奘問題を解決するものである。

スバンドウが示唆するもの

またディグナーガ, クマーリラ, ウッディヨータカラの情勢をよく知っていたらしいスバンドウが『ヴァーサヴァダッター』でダルマキールティを示唆していることを註釈者のシヴァラーマは, “bauddhasaṅgatim iva alaṅkārabhūṣitām” を, 「ダルマキールティの讃歌で荘嚴された」と解釈したことと関連して前掲書序論第2章第3節で詳しく見た。但し p. 41, l. 8 を「その子を破ったカンヤークブジャの王が」とお詫びして訂正します。ダルマキールティはスバンドウの年代より上って, ここでもフラウワルナー説は成立しない。キースはスバンドウの年代を,

Subandhu must be placed in the second quarter of the seventh century.

と言う (*A History of Sanskrit Literature* [Delhi: Motilal Banarasidass, 1993], p. 308)。

この書はスバンドウを二十数回も挙げて論ずるのである。シュタインケルナー博士にダルマキールティの「仏涅槃讃」の研究 “*Buddhāparinirvāṇastotram*” (*Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 17, 1973) がある。アシュヴァゴーシャの『無常経讃』(『三啓経』) が有部の集会で諷頌された, と義浄が『南海歸寄内法傳』で伝えたように, スバンドウに依ればダルマキールティの讃仏偈も法要を盛り上げたらしい。ダルマキールティの慨嘆にも拘わらず, 意外に有名だったようでもある。かくて “Alaṅkārah” とはダルマキールティの仏陀歎徳を「飾り」と言ったことになる。かくてダルマキールティは 550-620 年頃の人となる。

結論

以上, かねてのダルマキールティ年代 c. 550-620 年説を補強する幾つかの資料

(88) ダルマキールティ年代論の追加資料 (木 村)

を追加した。特に玄奘と護法関係の記録は基本である。

- 1) *Dharmakīrti's Thought and Its Impact on Indian and Tibetan Philosophy*, edited by Shoryu KATSURA (Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften, 1999). この第三回ダルマキールティ学会を主宰された E.シュタインケルナー先生と桂紹隆先生に篤く御礼申し上げます。
- 2) *Pramāṇavārttikam*, edited by R. Sāṅkṛtyāyana (Allahabad: Law Journal Press, 1943), *Karnakagomīṭikā*, pp. 485–486; M. BIARDEAU, *La Démonstration du Sphoṭa par Maṇḍana Mīśra* (Pondichéry: Institut Français d'Indology, 1958), p. 102.
- 3) A. B. KEITH, *A History of Sanskrit Literature* (Delhi: Motilal Banarasidass, 1993), preface, pp. 21–22; A. W. THRASHER, "The Dates of Maṇḍanamīśra and Śaṅkara," *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 23 (1979), p. 139.
- 4) Erich FRAUWALLNER, "Landmarks in the History of Indian Logic," *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens* 5 (1961).
- 5) 小野基「仏教論理学派の一系譜——プラジュニャーカラグプタとその後継者たち——」(『哲学・思想論集』第21号, 1995), p. 156. なお小稿「ダルマキールティにおける現観ヨーガ論」(『印度學佛教學研究』第60巻第2号), p. 1026の「著者の死後30~40年を要した」は「半世紀を要した」の誤記でした。お詫びして訂正します。
- 6) 慧立・彦悰『大慈恩寺三藏法師傳』(大正蔵第50巻, no. 2053), p. 237上段, 「更安置上房。在護法菩薩房北」。
- 7) 中村元『初期のヴェーダーンタ哲學』(岩波書店, 1981), p. 114; 伊原照蓮「マランダナミシュラの年代」(『宗教研究』第37巻第4輯, 1964), p. 196.
- 8) *Pramāṇavārttikam*, edited by R. Sāṅkṛtyāyana (Allahabad: Law Journal Press, 1943), preface, pp. 6–8.
- 9) *Nyāyabindu with the Dharmottarapradīpa*, edited by D. Malvaniya (Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1955), p. 182.
- 10) シャイエル論文のコピーを頂戴した高野克弘氏に篤く御礼申し上げます。
- 11) 山口益『佛教における無と有との對論』(山喜房佛書林, 1941), pp. 54–57.
- 12) 西義雄「三世実有論の研究——特に体滅・用滅両論の批判——」(『宗教研究』第8巻第1輯, 1933); S. Schayer, *Contributions to the Problem of Time in Indian Philosophy*, Tom 11 (Krakow: Rocznik Orientalistyczny, 1938).

〈一次文献〉

Ernst STEINKELLNER. *Dharmakīrtis frühe Logik. I, Introduction, Übersetzung und Analyse*. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies, 2013.

Dharmakīrti's Thought and Its Impact on Indian and Tibetan Philosophy. Edited by Shoryu Katsura. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1999. (pp. 209–214)

- Pv.: *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti*. Edited by Raniero Gnoli. Roma: Istituto Italiano per Il Medio ed Estremo Oriente, 1960.
- Pramāṇavārttikam with the Karṇakagominīkā*. Edited by Rāhula Sāṅkyāyana. Allahabad: Allahabad Law Journal Press, 1943.
- Brahmasiddhi by Maṇḍanamiśra*. Edited by Kuppuswami Sastri. Madras: Journal of Oriental Research, 1937.
- Madleine BIARDEAU. *La Demonstration du Sphoṭa*. Pondichéry: Institut Français d'Indology, 1958.
- Allen W. THRASHER. "The Dates of Maṇḍana Miśra and Saṅkara." *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Südasien* 23, 1979. (pp. 117-139)
- Erich FRAUWALLNER. "Landmarks in the History of Indian Logic." *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens*, 1961. (pp. 125-148)
- Nyāyabindu with the Dharmottarapradīpa*. Edited by Dalsukh Malvaniya. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Insitute, 1955.
- Christian LINDTNER. "Apropos Dharmakīrti: Two New Works and a New Date." *Acta Orientalia* 41, 1980. (pp. 27-37)
- Stanislaw SCHAYER. "Notes and Queries on Buddhism." *Rocznik Orientalistyczny* 9, 1935. (pp. 206-213)
- Ak.: *Abhidharmakośa and Bhāṣya of Vasubandhu*. Vol. 2. Edited by Dwarikadas Sastri. Varanasi: Bauddha Bharati, 1998.
- Arthur Berridale KEITH. *A History of Sanskrit Literature*. Delhi: Motilal Banarasidass, 1993.
- The Vāsavadattā, A Romance by Subandhu*. Edited by Fitzward Hall. Bibliotheca Indica 116, 130, 148. Reprinted by Osnabrück, 1980.
- The Vāsavadattā, A Sanskrit Romance by Subandhu*. Translated by Louis H. GRAY. New York: AMS Press, 1965.
- (この両書は東京大学図書館の資料であり、閲覧・コピーで当時インド哲学研究室の助手であられた横地優子先生の御世話になりました。篤く御礼申し上げます。)

〈二次文献〉

木村俊彦『ダルマキールティにおける哲学と宗教』(大東出版社, 1998)

以下は紙幅の都合で省略する。本文を参照されたい。

〈キーワード〉 ダルマキールティ, 年代論

(四天王寺大学名誉教授, 文博)